孫について

小林まもる

④

生まれて初めて見た
花火だもの
キャ　ウワ　ヤー

怖いけど真っ暗には
なれてきた　そこに
鮮やかな菊花　日輪や星の
宇宙が一瞬開いて

ひかりってすごいね
感じるだけでいっぱい
今　ただ今を
感覚する孫よ

⑤

孫の眼に
学生の頃のわたしが映った
やくざな男の算術
やぶれかぶれの
希望を煮詰め
「おふくろ　勘弁」
駆け出した
寺山修司きどりの
猫背のすがた

⑥

遠雷や
山ひぐらしの
なくばかり

雷鳴を
孫と送りて
午睡かな

ゆめうつつ
雷遠ざかる果て
孫のこえ

⑦

わたしの耳は　地獄耳です
泣きさけぶ　あの小さな
ケモノのような　コエではなく
喃語を発するようになった
乳呑み児の　あの孫のこえは
まちがえなく　天上のほうから
聞こえてきたのです

⑧

わたしの高価なショルダーバックに
ボールペンで落書きをしたのは
あれにちがいないのですが
叱ったりはできません
古くなればなるほど
付加価値のつく勲章のような
それでもちょっと痛い
おくりものだからです

⑨

これからは四六時中
詩のことばかり考えて
暮らして生きたいといったら
きっと孫は勘違いするだろう

「じーちゃん　死んじゃダメ」

ああーでも
その通りかもしれない

孫を思うことは死を考えること
詩は底深く
死を抱えて
成り立つことなのだから